

## 丸裸で埋められた戦友の恨みは

永久に忘れられない

岐阜県 若尾美義

昭和二十(一九四五)年十月十五日、タイセット駅に到着、下車。それから三日二晩、徒歩で行軍が始まり山の中に入りました。何という地名か不明。それから丸四年の抑留生活が始まりました。そして最初にした事は、幕舎の設営と炊事用の薪取り等でした。

二月より作業開始です。伐採です。雪深い山の中に入り、長さ何メートルもある大木の切り出しです。初めて手にする二人用のノコギリ、使ったことのない者では大変な作業でした。

二十一年九月に身上調査があり、收容所の中に自動車部隊ができる事になり、そちらに編入させられました。その後、運転試験に合格、運転手として勤務。二十三年に修理部に編入され、二十四年九月、帰国まで

働きました。

いま考えてみますと、よく元気に帰れたものです。運転手など特別な職にあった私達は、運のいい方だったと思います。

四年間の抑留生活の中でどうしても忘れることのできない事件が一つあります。それは、約十メートル以上の材木を台車に積込み作業中、過って大木の下敷きとなって二人の戦友が命を落としたことです。即死でした。それからが大変でした。ロシア人のマッセルは、衣類を全部取って裸にせよと命令しました。衣服をはぎ取られた戦友を裸のまま穴を掘って埋めたときの悲しさ、哀れさは、一生忘れれることはできません。まさに地獄とはこの事でしょう。

私は叫び続けます。「亡き戦友よ、安らかに眠って下さい」と。そして、こんなひどい目に遭わせながら、何の謝罪も補償もしようとしないロシアという国を恨みます。この世に正義がある限り、抑留のすべてが明らかにされ、ロシアが断罪される日が必ず来ることを願っている。